恥をかかない文書術 ②

実践マナー塾

「御中」の 用法間違え 笑われる

「御中」の意味を知らない人が増えていると思う。「御中」は「お名前がわからないのですが、その会社、その部署にいる方に差し上げます」の意味。だから「現代礼法研究所御中　岩下宣子様」という書き方は本来あり得ないはずだ。

少し前まで多かったのは「御中知らず」といって、クイズに応募するときも「〇〇係行」だけで御中を書かない人。しかし、最近はあて名の人物が特定されているにもかかわらず、会社名の後に「御中」をつける人が多いようだ。

このことは、二重敬語が多くなっていることと関係があるように思える。二重敬語というのは、例えば「お見えになりました」とすべきところを「お見えになられました」、「おいでになります」を「おいでになられます」などとすること。相手に敬意を示すことは大切だが、「過ぎたるは及ばざるがごとし」だ。

相手の名前を知りながら会社名に御中を付けてしまうのは「丁寧にしなくては」という思いが強いからだろう。こうした気持ち自体は良いのだが、語法はきちんと押さえておく必要がある。

逆に、はがきの表書きに夫婦連名のあて名の下にまとめて「様」を一つだけ付ける人もいる。夫婦は二人で一組だが、敬意を省略して一束にしてはダメ。敬称は一人、一人に付けるものだ。

（マナーデザイナー　岩下　宣子）